

日本語の複合動詞「V1-あげる」「V1-あがる」と 中国語の“V1-上”“V1-起来”の対照研究

南 明世

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

cluster358@yahoo.co.jp

1. はじめに

日本語の複合動詞は、上級学習者でも使用が難しく(森田 1990)中でも「V1-あげる」「V1-あがる」の用法は、意味が多岐にわたるため習得が困難である。そこで「V1-あげる」「V1-あがる」について、中国語の“V1-上”“V1-起来”と対照し、日本語教育に役立てることを目的とする。

2. 先行研究

複合動詞「V1-あげる」「V1-あがる」の先行研究に姫野(1999)がある。姫野(1999)では、「V1-あがる」を「上昇」「完了・完成」「強調」「図々しさ」「尊敬語」の5つに大別し、「V1-あげる」を「上昇」「下位者(上位者)から上位者(下位者)に対する社会的行為」「体内の上昇」「完了・完成」「強調」「その他」の6つに大別している。またそれぞれいくつかの下位分類を設けている。しかし、姫野(1999)が「完了・完成」に分類しているものは、中国語との対応を見た場合にずれが生じる。また、使用できない動詞についてはあまり明示されていないため、使用できない動詞の観点からも考察していきたい。

日中対照研究の先行研究では「V1-あげる」と“V1-上”の研究は見られるが(王 2014等)“V1-起来”と対応する場合も多いため、本研究では中国語“V1-上”“V1-起来”を踏まえたより子細な対照を試みる。

3. 日本語の複合動詞「V1-あげる」の分類

本研究では「V1-あげる」を①上昇、②完了、③極度の3つに大別する。

3.1. 「V1-あげる」の用法：①上昇

①上昇とは(3)のようにV1の動作によって対象が上げられることを表す。

(3) 親が赤ん坊を抱きあげる。(その他「持ちあげる」「打ちあげる」等)

	タイプ①物理的用法	タイプ②抽象的用法	タイプ③自動詞的用法
求心的用法	(綱を)引きあげる	(人材を)引きあげる	(家に)引きあげる
遠心的用法	(荷物を)押しあげる	(人材を)押しあげる	—

以上の5つに下位分類できる。これは姫野(1999)の分類の「上昇」、「下位者(上位者)から上位者(下位者)に対する社会的行為」、「体内の上昇」に相当する。この用法はV1が瞬間動詞¹につくが、継続動詞の場合には①上昇ではなく②完了の意味を持つと考えられる。つまり、(4)「持ちあげる」は①上昇に、(5)「編みあげる」は②完了になる。

(4) カバンを持ちあげる。(①上昇) (5) マフラーを編みあげる。(②完了)

3.2. 「V1-あげる」の用法：②完了

②完了とは、(6)のようにV1の動作が最後まで終わったことを表す。

(6) 家を作りあげた。(その他「仕あげる」「書きあげる」等)

これは姫野(1999)でいう「完了・完成」のうち「完成品を伴う作業活動の完了」にあたる。①上昇の場合と異なり、動詞に時間幅がみられる継続動詞で使われるが、「寝る」など自動詞の場合には「V1-あげる」は使用できない。姫野(1999)でも述べられているように、完成物が想定されなければならない。例えば読むことの修了をあらわす場合(7a)の「V1-終わる」となるが、この場合完成物がないため(7b)は完了の意味にはならず、「気持ちを込めて」などの③極度の用法になる。

(7) a. 小説を読み終えた。(動作の修了) b. 小説を読みあげた。(③極度)

3.3. 「V1-あげる」の用法：③極度

③極度とは(9)のようにV1の動作が極限まで行われた結果レベルが上がることを表す。

(9) 声を張りあげた。(その他「おだてあげる」「^と抜きあげる」等)

これは姫野(1999)でいう「強調」、「完了」のうち「作業活動の完了」にあたる。「調べあげる」などの「作業活動の完了」を入れたのは、②完了で定義した完成物が具体的には想定されず、「徹底的に」といった③極度を表す副詞が付きやすいためである。また中国語と対照した場合、②完了では“V1-好”“V1-出”と決まった形を表すが、③極度の用法は決まった形式が見られないため、両者を分けて分類する必要があると考える。②完了と同じく継続動詞につきやすいがその結果を必要とするため、継続動詞でも結果が見えにくい「住む」などは「V1-あげる」とは共起しにくい。(10)の例をしてみる。(10a)の「おだてあげた」結果「とても喜んだ」は相応しいが、(10b)「喜ばなかった」であれば容認度はさがる。その場合、(10c)のように「おだてる」であれば「喜ばなかった」は使用できる。

- (10) a. 彼をおだてあげたら、とても喜んだ。
b. ?彼をおだてあげたたが、喜ばなかった。
c. 彼をおだてたが、喜ばなかった。

4. 「V1-あがる」の分類

本研究では「V1-あがる」を①上昇②完了③極度の3つに大別する。

4.1. 「V1-あがる」の用法：①上昇

①上昇とは、(11)のようにV1の動作によって対象が上がることを表す。

(11) 泥が跳ねあがった。(その他「勝ちあがる」「吸いあがる」等)

	タイプ①：物理的用法	タイプ②：抽象的用法
対象の位置変化	(桜が)舞いあがる	(感情が)舞いあがる
主体の位置変化	(階段を)駆けあがる	勝ちあがる

以上の4つに下位分類できる。姫野(1999)でいう「上昇」、「尊敬語」の用法である。「V1-あげる」と同様、継続動詞より瞬間動詞につく。しかし、「走る」と同じ動作を表す「駆けあがる」は継続動詞でも「V1-あがる」が付く。

(12) a. 階段を駆けあがる。 b. *階段を走りあがる。

これは、「駆ける」が「走る」よりも瞬間動詞に近く、一步一步の走るという動作の連続だと見なしているため使用できるのではないか。

4.2. 「V1-あがる」の用法：②完了

②完了とは、(13)のようにV1の動作が最後まで終わったことを表す。

(13) ケーキが焼きあがった。(その他「書きあがる」「できあがる」等)

これは姫野(1999)でいう「完了/完成」のうち「作業活動の完了」である。「V1-あげる」と同様、継続動詞の他動詞につき、継続動詞の自動詞にはつかない。また、完成物が想起されるため、対象の有無が重要であり、動作主に焦点がある「食べる」などは継続動詞でも使用できない。また②完了の用法は対象が存在するため、(14)のように「V1-あげる」と「V1-あがる」で対応して使用することができる場合が多い。

(14) a. ご飯を炊きあげた。(②完了) b. ご飯が炊きあがった。(②完了)

4.3. 「V1-あがる」の用法：③極度

③極度とは(15)のようにV1の動作が極限まで行われることを表す。

(15) 空がすっかり晴れあがった。(その他「干あがる」「澄みあがる」等)

姫野(1999)の「強調」、「図々しさ」、「完了」のうち「自然現象の完了」にあたる。「徹底的に」など極限を表す副詞と共起しやすく継続動詞につく。

5. 中国語との対応

①上昇の“V1-上”“V1-起来”との対応から4つに分類した。

- I. “V1-上”に対応：なであげる(向上擦)/駆けあがる(跑上去)
- II. “V1-起来”に対応：たくしあげる(卷起来)/燃えあがる(烧起来)
- III. “V1-上”“V1-起来”に対応：浮きあげる(浮上来, 浮起来)/ずりあがる(提上来, 提起来)
- IV. どちらにも対応しない：借りあげる(征借)/召しあがる(用餐)

まずIとIIに該当する日本語のV1は「上(前)方向」の意味があるかで違いがみられる。

IIに該当する動詞「拾う」などではその行為は必ず上方向で行われるのに対し、Iに該当する「押す」や「這う」といった動詞は「上」という方向性は特に決まっておらず、「V1-あがる」がつくことで上方向の意味が付け加えられる。IIに分類される(16)たくしあげる(卷起来)をみってみる。もし“卷上来”を使用した場合、大きくたくしあげることを想起し、やや大げさに聞こえる。「たくしあげる」は単なる袖があがることを意味しているため“卷起来”のほうが適当である。

(16) 我{卷起来/*卷上来}衬衫的袖子。(袖をたくしあげる。)

つまり、“V1-上”は上がり幅にかなり大きな差がある場合のみ使用できる。そのため、もともと上方向への意味が含意されない動詞で使用できるのである。IIIでは、IIと同様にV1にもともと上方向への意味が含意されている動詞が該当するが、特に大きな上がり幅を伴う上昇と少ない上がり幅を伴う上昇の両方の意味で捉えられる動詞である。最後にIVに関しては、身分の上下など抽象的な用法であるため、対応する形がないと思われる。以上から、「V1-あげる」「V1-あがる」の上昇の用法では一概に“V1-上”“V1-起来”に対応するとは言えず、上がり幅や動詞のもつ上方向によって変わることが分かった。

注 (1) 金田一(1950)では、動詞を「状態動詞」、「継続動詞」、「瞬間動詞」、「第四動詞」の4つに分類し、「～ている」の形で動作の進行を表しているものを「継続動詞」、結果の残存を表しているものを「瞬間動詞」とした。

参考文献

- 王秀英(2014)「上昇を表す複合動詞の日中対照研究 — 「～上げる」と「～上(shang)」を対象として—」『文化』77(3・4), 東北大学文学会, 53-73
- 金田一春彦(1999)『日本語動詞のアスペクト』, 麦書房
- 姫野昌子(1999)『複合動詞の構造と意味用法』, ひつじ書房, 35-57
- 森田良行(1990)『日本語学と日本語教育』, 凡人社, 278-295